

子どもの農地での遊びを充実させるための研究 -「田んぼの学校」を舞台に- Research on enrichment of play at farmland -A Case Study of “Tanbo-no-Gakkou” -

○野崎はな*・杉田早苗**

NOZAKI Hana, SUGITA Sanae

1. はじめに

農地面積や基幹的農業従事者の減少、生活様式の変化により、現代の多くの子どもにとって農地は身近でも遊び場でもなくなっている。しかし農地で遊ぶことは楽しく、また子どもである時期に農地に親しみ遊ぶことは子どもの成長にいい影響を与えると考えられる。よって、多くの子どもたちに農地で遊ぶという経験を提供できる仕組みや環境を整えることが望ましいと考える。

本研究では「田んぼの学校」に着目し、①「田んぼの学校」の活動実態の把握及び②活動を遊びの観点から評価、今後の「田んぼの学校」のあり方を提言することを目的とする。

2. 方法

はじめに「田んぼの学校」の現在の活動実態を把握するため、「田んぼの学校」支援センターに登録の 67 団体を対象に学びと遊びに関わる活動実態を調査した。回収は 33 団体（回収率 49%）である。

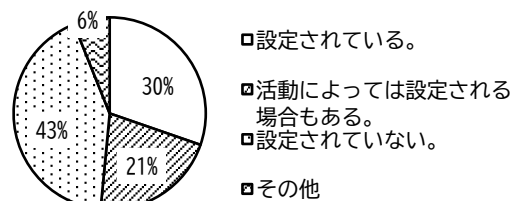
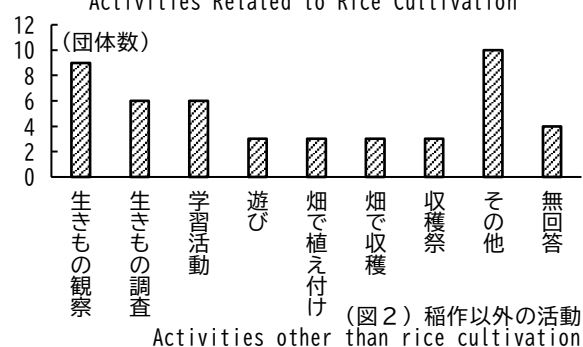
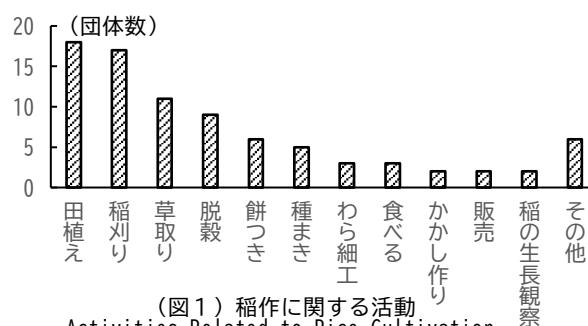
次に遊びの現状を評価することを目的とし、アンケート回答団体の中から 3 団体を選定し、ヒアリング調査と現地調査等から現状を把握し、子どもの遊び空間について研究した室崎ら（1989）を参考に 9 つの評価軸を設定して、遊びの評価を行った。

3. 結果と考察

(1) 田んぼの学校の活動実態

参加対象に小学生を、活動場所に田を選んだ団体が非常に多いこと（32/33 団体）、活動内容に稲作に関する活動をほとんどの

団体（28/29 団体）が挙げていることから、「田んぼの学校」は小学生を主対象に、稲作に関連する活動を中心に行っていた。また、稲作以外の活動では生きものの観察・調査など学びを主とする活動を実施する団体が多くみられたが、「遊び」とつく活動を実施する団体は 3 団体のみであった。自由時間を設定している団体は 3 割程度しかなく、子どもが発案した遊びを行う機会があると回答した団体は 1 割程度に留まったことから、水田、水路、ため池、里山等を“遊び”と“学び”の場として活用する環境教育とし



(図3) 活動内での自由時間の設定の有無
Whether or not free time in the activity

*関東農政局 Kanto Regional Agricultural Administration Office, **岩手大学農学部 Faculty of Agriculture, Iwate University キーワード：農地、遊び、田んぼの学校、子ども、自由利用度

(表1) 3団体の調査結果(概要) Results of the survey of the three organizations (summary)

組織名	立沢里山の会	ぽかぽかワークス	湧水町立幸田小学校
活動目的	田んぼを通して子どもたちが自然環境に親しみ、大切さを学ぶ	体験を通して都市の農業の大切さを伝える。	泥に触れる体験や横鎌での収穫を通し様々な学びを得る
活動場所状況	水田、畑、湿地、林、小さな池等	水田、草地	水田(棚田)
参加形態	小学校体験学習、地域の子ども会等	家族単位で自主参加	学校の活動の一環
主な活動内容	田植え、里山自然体験、田んぼ草取り、稲刈り、脱穀、出前授業等	泥んこ遊び・田植え、ザリガニ捕り体験、収穫祭等	田植え、稲刈り
活動で重視していること・大切にしていること	遊びながら学ぶこと、各自が個性を活かして自由に取り組むこと	安全第一で、どのような子どもも自由に遊べる空間を作ること	自己有用感や子どもたちの活動の成果を認めるような声かけをすること

ては遊びの側面が十分はないと考察される。

(2) 田んぼの学校の遊びの現状と評価

3団体の調査結果と評価を表1,2に示す。

立沢里山の会は、敷地に水田や湿地、小さな池を含み四季折々の変化があることから「遊びの誘発要素」の③⑤⑥は十分であった。また、敷地内外の境目がはっきりしているものの壁はないため立ち入りやすく、多様な起伏を含むため座っての活動場所としても利用しやすいことから④も含む。田んぼを通して子どもたちが自然環境に親しみ、大切さを学ぶことを目的に、遊びながら学ぶことを重視している。自己責任が大切という意識のもと、行動を制限される事が少ないため、「要素を発見し遊びが成立する条件」の①自由利用度が高く、③到達・接触利用も容易である。

ぽかぽかワークスは、敷地の水田や草地により⑤⑥が含まれる。しかし起伏はあるものの平面を主とし、敷地内を小空間に分割する境界線となるものや視界を遮るものが少ないため、③④は十分でない。微生物や土に触れる機会の減った名古屋の子どもたちにその機会を作ることが大切だと考え、遊びながら学ぶことを重視、危険が無い限りは自由に行動できる。しかし保護者も参加するため、保護者によって①自由利用度の低下や③到達・接触利用の制限が起こる場合がある。

湧水町立幸田小学校は、敷地の水田により⑤⑥が含まれる。しかし棚田であるため高低差はあるものの、その他の敷地構成要素や小空間がないことから③④は十分でない。

い。学校での活動のため、時間の制限があり①自由利用度は低く、③到達・接触利用ができない。自然との触れあいも大切にしているが、その主目的は田植え・稲刈りという体験を通した学びであった。

以上より、「要素」ではどの団体も活動場所として水田を含むことから、水や土、畦の植物といった⑤素材性や⑥自然性は十分であった。評価に差がみられたのは、③変化性と④たまり性で、これは構成要素の多様さがその違いを生んでいると考えられる。

「条件」では、②安全性はどの団体も活動時指導者の目があることから少なからず成立していた。評価に差が出たのは①自由利用度と③到達・接触利用であった。その要因は、子どもが自然と触れあうという活動の目的を、決まった活動の提供のみで達成しようとするか、子どもの自由な発想や行動によって果たそうとするのかという主催者側の意識の違いだと考えられる。この点を意識して主催者が遊びの環境と機会を可能な限り提供することが肝要だといえる。

(表2) 3団体の遊びの評価
Evaluation of the play of the three groups

団体名 上段：要素 下段：条件	立沢里山の会	ぽかぽかワークス	町立幸田小学校
①オープンスペース性	○	○	△
②遊具性	△	△	×
③空間形態の変化性	◎	△	△
④たまり性	○	△	×
⑤素材性	◎	○	○
⑥自然性	◎	○	○
①空間構成要素の中にある潜在的遊び誘発要素を子どもが自由に利用できる	◎	○	×
②安全である	△	○	○
③到達・接触利用できる	◎	○	×

注) 左列の要素は「遊びの誘発要素①-⑥」、条件は「要素を発見し遊びが成立する条件①-③」を示す